父が残したシベリア抑留[1]の記録

後世に伝える平和の尊さ

日本では終戦と考えられている昭和20年8月15日より後、ソ連軍の捕虜[2]となりシベリアの奥地へと送られ、収容所を転々としながら強制労働に従事せざるを得なかった多くの日本人がいます。約57万5千人のうち約5万5千人が亡くなりました。約4年間、そのような日々を送りながら、多くの絵と文章で精緻な記録を残してきた山下静夫さんの実体験を、静夫さん本人から語り継がれた子、山下喜史さんのお話から紹介します。

父のシベリア抑留１４５０日

山下　喜史

はじめに

父、山下静夫は、大正7年神戸市に生まれ、県立第一神戸商業学校を卒業後、在阪海運会社に勤務中の昭和18年に応召、姫路師団の輜重兵[3]として満州に渡り、同地で終戦を迎え、ソ連軍に捕えられて捕虜としてシベリアに送られました。

極寒の地で満足な住居も食料もない中、重労働に耐え2年秋、舞鶴に帰還したのでした。

抑留画が語る厳しい境遇

父は私が物心がつくかつかないかの頃から、4年間に起きたこと、感じたこと、考えたことを次のように幾度も語ってくれました。

わずかな黒パンと薄いスープだけで、飢えに苦しみながら、「枕木1本に日本人死者1人」と言われたバム鉄道[4]建設の重労働に耐えたことや、零下30度以下の刃物で切り裂かれるような極寒の中での森林伐採作業、肺炎と発熱で何日も苦しんだこと。

また、第40ラーゲリ（強制収容所）で全体会議議長に選出され、合唱、文化活動を行ったことや、第2ラーゲリで、画家として肖像画やプラカードを作成したこと、地域の住民との交流などです。

父を襲った戦時中と戦後抑留中の数々の厳しい境遇について、私が詳しく触れることができたのは、父が私のために残してくれた手記とそれらのシーンを黒ボールペン一本で自ら描き起こした白黒の抑留画、そして「シベリア抑留１４５０日」という画文集を読んだ時でした。

その中から父の言葉の一部を紹介します。

父の手記から

「ソ連兵に監視されながらの行進（日本への帰国と騙され、実際はシベリアに連れていかれている）。虜囚[5]の旅、凍てついた路面に足が滑る。鶴が3羽南に渡って行くのを見て、たまらなく羨ましかった。兵隊たちは、皆日本へ帰ると勇んでいるだけに気分が重かった。シベリアってどんなとこだろう」。

「9月になるとめっきり冷え込みが強くなり、伐採の手に風花が舞った。帰国の目途のないシベリアの生活に重苦しい冬の前触れを見ることはたまらなかった。そして、この日から3日後、初雪が降り、2度目の冬を迎えていた。またあの恐ろしい冬が迫る」。

「極寒の朝、寮から出て外気に触れた瞬間ピーンと張りつめた大気が強烈な圧力で身体を締め付け、氷の鋳型に嵌め込まれたような気分になり足裏から背筋から寒気が突き刺さる」。

父への思い

幼い頃から父の話の断片が具体的なイメージとなりシベリアの地の過酷さと悲劇をもたらした戦争というものの本質について改めて考えさせられました。

終戦直前、父は郷里神戸に残した妻子を亡くしたのですが、その報を受けたことで抑留に当たっての気持ちが少し楽になったこと、ある時父がふと漏らしたことがあります。

父は舞鶴に帰還した際にマラリア[6]を発症し、入院した病院で看護師だった母と出会い私が生まれたと聞いています。

シベリア抑留がなければ、私はこの世にいなかったわけで、シベリアの厳しい環境のなか幾度も生死の淵をさまよいながらも知恵を絞ってなんとか生きて帰ってきた父、その後も幾多の苦労のなかで私を育んでくれ、晩年は母に先立たれたものの、不自由な一人暮らしのなか創作活動に精力的に取り組んでいた父の姿に凡庸な一人息子はただ頭が下がるばかりです。

最後に

これからも、父が残した画文集、「シベリア抑留１４５０日」を一人でも多くの人にご覧いただき、父が当時、目にし、耳にし、肌で感じた情景を追体験いただき、こんなことを引き起こした戦争というものは二度とゴメンだという父の思いの一端に触れていただければ幸いです。

（「広報伊丹」令和３年８月１日号掲載）

---

1 第二次世界大戦の終戦後、武装解除され投降した日本軍捕虜らが、ソビエト連邦によってシベリアなどへ移送・抑留され、強制労働に従事させられたことに対する、日本側の呼称。

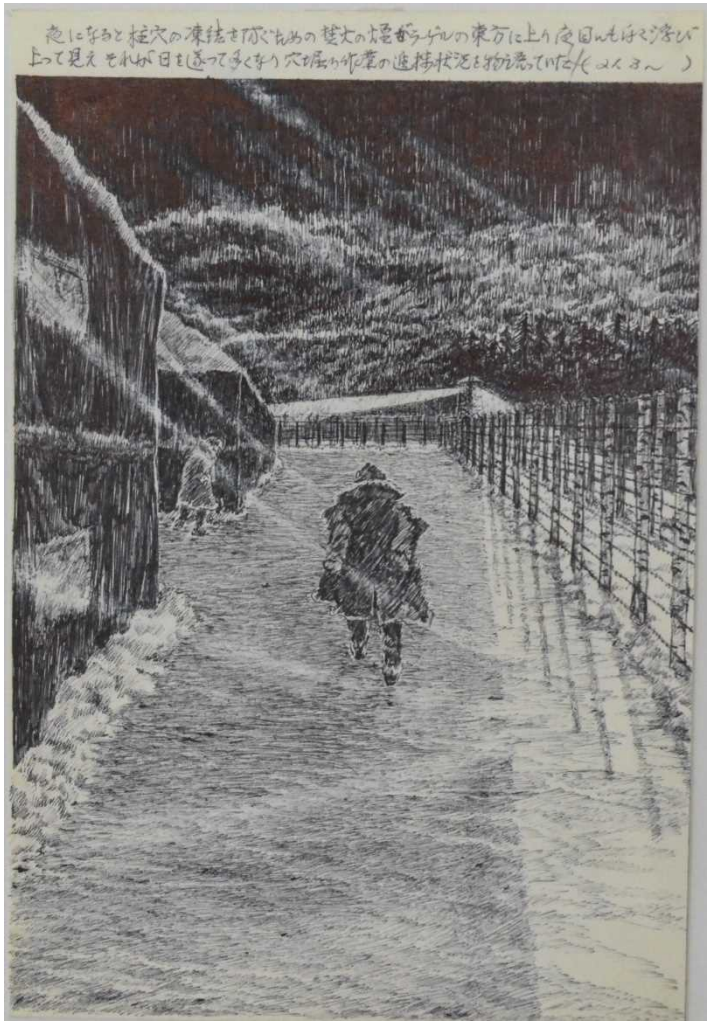
2 戦争などで敵軍に捕えられた者。

3 旧陸軍兵科の一つ。軍隊の糧食、被服、武器、弾薬などの輸送をおもな任務とした。

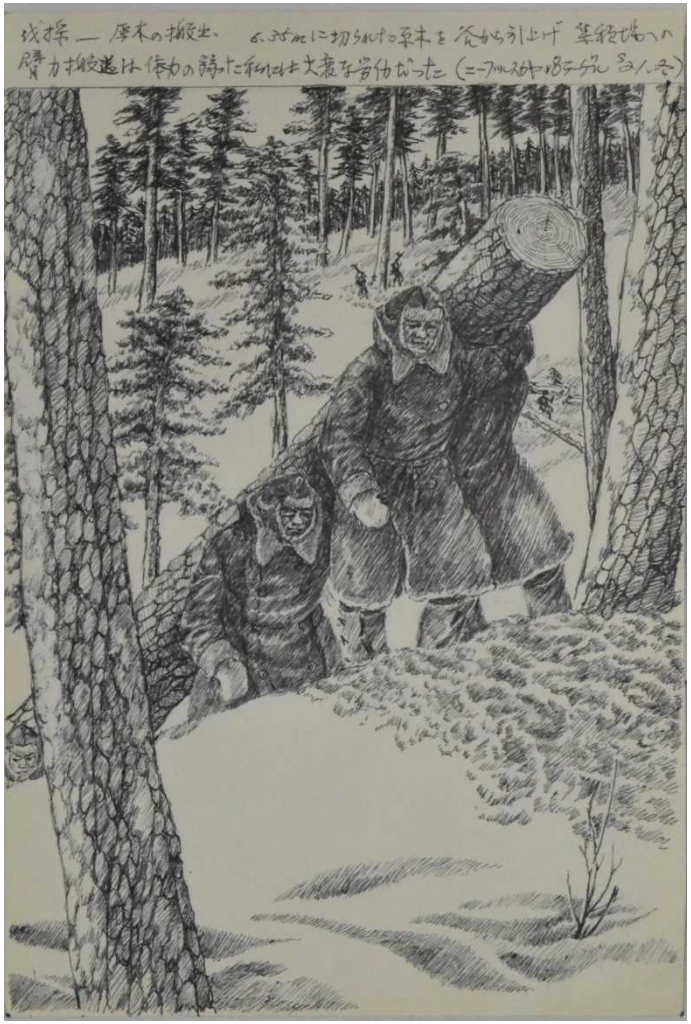
4 ロシア連邦東部のシベリア地方にある東西４千300キロメートルに及ぶ鉄道路線。

5 捕虜のこと。

6 蚊によって媒介される感染症。発熱や悪寒、頭痛、関節や筋肉の痛み、関節痛、筋肉痛、嘔吐、下痢といった症状が現れる。



夜になると柱穴の凍結を防ぐための焚火の煙がラーゲルの東方に上り夜目にも白々浮び上って見えそれが日を追って多くなり穴掘り作業の進捗状況を物語っていた



伐採―厚木の搬出　　6.35mに切られた原木を谷から引上げ集積場への臂力搬送は体力の弱った私には大変な労仂だった